



[果樹部門]

[農業研究所ホームページへ](#)

3. モモ胴枯細菌病は樹勢が強いモモ樹ほど発生しやすい

[要約]

モモ胴枯細菌病（急性枯死症）の発生には樹勢が影響し、特に樹勢が強い場合に発生しやすい。

[担当] 岡山県農林水産総合センター農業研究所 果樹研究室

[連絡先] 電話 086-955-0276

[分類] 情報

[背景・ねらい]

本県の一部のモモ園で、急速な落葉と樹幹や主枝からの赤褐色の樹液流出を伴うモモ胴枯細菌病（急性枯死症）が主に秋期に発生しており、問題となっている。これまでの結果から、発病樹の樹勢がやや強い傾向がみられる。そこで、本病の発生と樹勢との関係を明らかにし、モモ胴枯細菌病の発生を樹体生育の観点から把握することで本病害の発生要因を解明する。

[成果の内容・特徴]

1. 令和 2 年から令和 6 年までにモモ胴枯細菌病の発病樹及び未発病樹を調査した（表 1）。
2. モモ胴枯細菌病の発病樹は、未発病樹と比較して、達観評価による樹勢が「やや強い」及び「強い」の割合が多く、「弱い」と判断された樹はない（図 1、表 2）。
3. 強樹勢樹では、標準樹勢樹に比べてモモ胴枯細菌病菌を接種した場合の発生が多い（図 2）。
4. 発病樹では未発病樹と比較して、樹冠占有面積当たりの徒長枝本数がやや多い傾向である（表 2）

[成果の活用面・留意点]

1. 若木期での発生が多いため、地力の高い圃場などでは堆肥の多投入や過剰な施肥などを避け、樹勢を強くし過ぎないように管理する。
2. 現地での発病樹と未発病樹の樹勢は、達観で樹齢、樹姿、主幹部の色、樹冠占有面積及び徒長枝本数などから総合的に 5 段階で評価した（図 1、表 2）。
3. 岡山農研でのポット栽培樹の樹勢評価は、「清水白桃」における樹勢診断指標を基に評価した（図 2）。



[具体的データ]

表1 現地調査で供試した樹の内訳

年度	調査本数	
	発病樹	未発病樹
令和2	3樹 (4～5年生)	29樹 (1～7年生)
令和3	40樹 (2～7年生)	10樹 (2～7年生)
令和4	9樹 (2～3年生)	7樹 (2～3年生)
令和5	4樹 (5～6年生)	3樹 (5年生)
令和6	13樹 (2～6年生)	9樹 (2～6年生)
計	69樹	58樹

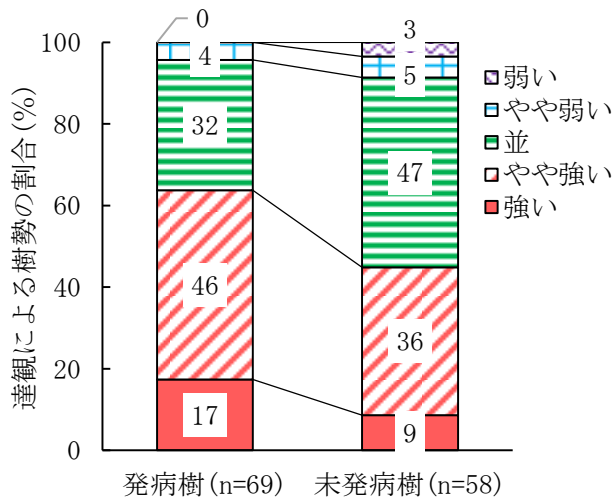


図1 現地の発病樹及び未発病樹の達観による樹勢の割合（令和2～6年）

^z 樹勢評価は、樹齢、樹姿、主幹部の色、樹冠占有面積及び徒長枝本数などを加味して5段階評価（1:弱い、2:やや弱い、3:中庸、4:やや強い、5:強い）で評価

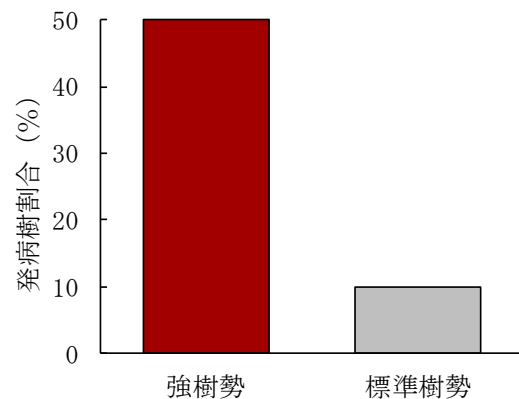


図2 ポット栽培における「清水白桃」の樹勢とモモ胴枯細菌病の発生との関係（令和5年、n=10）

注1) 100Lポットによる栽培で、ポット当たりの年間の総窒素施用量は、強樹勢樹が46.6g、標準樹勢樹が8.2g

注2) 発病樹割合は、胴枯細菌病菌の樹体への接種によって発生した樹の割合

注3) 樹勢評価は「清水白桃」における7～8月の葉の大きさ及び重さによる樹勢診断指標

表2 現地の発病樹及び未発病樹の樹相（令和2～6年）

樹	樹勢が「やや強い」以上の割合 ^z (%)	樹冠占有面積当たりの徒長枝本数 (本/m ²)
発病樹	63.8	4.2
未発病樹	44.8	2.7
有意性 ^y	*	ns

^z 樹勢評価は（1:弱い、2:やや弱い、3:中庸、4:やや強い、5:強い）の5段階評価で、樹齢、樹姿、主幹部の色、樹冠占有面積及び徒長枝本数などから評価

^y 割合は χ^2 検定、徒長枝本数はt検定により、5%水準で*は有意差あり、nsは有意差なし

[その他]

研究課題名：果樹等の幼木期における安定生産技術の開発

（急性枯死症状の発生要因の解明と対策技術の開発）

予算区分・研究期間：受託（農林水産研究推進事業（受託プロ））・令和2～6年度

研究担当者：吉村諒介、川上敦子、大家理哉、佐々木郁哉、河村美菜子、桐野菜美子、苧坂大樹、森次真一、水田有亮

関連情報：1) 農業研究所主要成果、[令3 \(25-26\)](#)、[令4 \(33-34\)](#)、[令6 \(25-26\)](#)

2) 高野（2010）岡山農研報、[1:23-90](#)